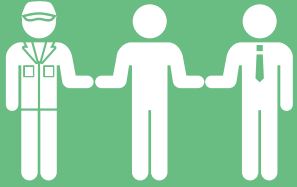


## (2) 地域創生部門

部門長 今井 潤 (三陸復興・地域創生推進機構 教授)

▼地域創生部門 HP



地域創生部門は、民間企業や自治体等と岩手大学を結ぶ窓口として、金融機関を含む産学官金ネットワークの構築、学内研究シーズと地域のニーズとのマッチングなどを行っている。また、相互友好協力協定締結自治体との実践的な活動として、県内3市から市職員を共同研究員として受け入れ、機構全体の活動と連携し、震災復興から産学官連携による様々な地域創生の取組を進めている。

### 活動テーマ と 概要

- ・ 地域創生モデルの構築
- ・ 組織的な産学官連携の推進
- ・ 地域志向研究の促進

代表者 三陸復興・地域創生推進機構：今井 潤

担当者 三陸復興・地域創生推進機構：山下 晋、小川 薫、伊藤 ひろみ、  
小山 康文、貫洞 義一

1. 岩手県における新たな地域創生モデルを構築し、さらにその知見を大学院総合科学研究科に還元することにより、地域創生人材の育成を推進する。
2. 産学官連携のワンストップ窓口として、地域企業等への研究シーズの紹介と地域が抱える課題やニーズの収集を行い、研究者とのマッチング機会を数多く設けることにより、地域企業等との共同・受託研究を推進する。また、「銀河オープンラボ」を中心にオープンイノベーションを進めることにより、社会的インパクトを有する産学官連携プロジェクトを創出する。
3. 県内自治体との相互友好協力協定の締結を進め、協定に基づいた連携の取組や自治体等への提言を行うことにより、地域の持続的発展に貢献する。

### 活 動 内 容

#### ● 地域創生人材育成の推進

1. 大船渡市との共同研究として、高校生と社会人を対象に、同市の地域課題からビジネスプランを作成する地域創生人材育成プログラムを実施した。
2. 「ふるさと発見！大交流会 in Iwate 2018」併催イベントとして、学生にとって魅力ある生き方や働き先を考える機会を提供することを目的に「市職員の仕事っているいろいろある～約10年の経験から伝えられること～」を共同研究員が中心に企画・開催した。



ビジネスプラン作成講座

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産教育研究部門	平泉文化教育研究部門	地域防災教育研究部門	ものづくり技術教育研究部門

3. 地域企業等が各研究室をツアー形式で訪問し、教職員と気軽に話すことで大学の研究に触れ研究室の今を知っていただくことを目的として、不来方祭当日に実施されるオープンキャンパスの研究室公開に併せて産学連携研究室ツアーを実施した。



大交流会併催イベント

## ● 産学官連携プロジェクトの創出

1. 岩手県の強みである産学官が連携したオール岩手体制により、「地域イノベーション・エコシステム形成プログラム」等の大型研究プロジェクトに申請した。また、農林水産省『「知」の集積と活用場®』の研究開発プラットフォームを新たに立ち上げた。
2. 事業化可能性の高い研究シーズを軸に参画企業と研究開発から実証までを行う拠点「銀河オープンラボ」を開所した。また、学内外の関係者向けに「銀河オープンラボフォーラム～岩手大学発・革新的技術による地域からのイノベーション拠点～」を開催し、入居する3グループの研究シーズ紹介を行った。
3. 岩手大学とトヨタ紡織㈱は、将来のモノづくり革新に向けた生産技術力の強化を中心に連携するため、「生産技術開発を中心とした連携と協力に関する包括協定」を締結した。



銀河オープンラボ

▼銀河オープンラボ



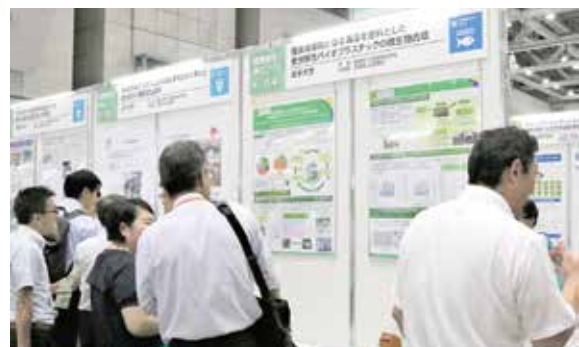
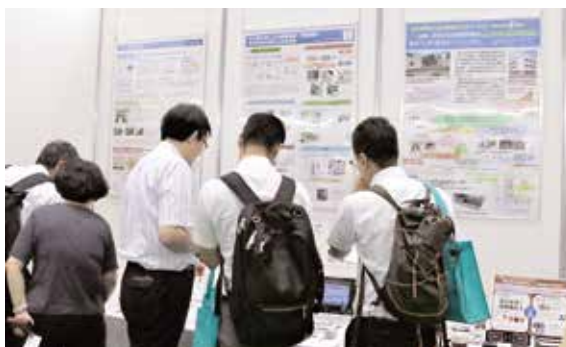
トヨタ紡織㈱との包括協定締結

▼包括協定締結



## ● 外部資金獲得支援

1. 外部資金公募情報を収集し、学内教員（理工学部、農学部を中心に）にメールにて情報発信し学内周知を図り、申請を促した。
2. 各教員が作成した外部資金申請書類の添削を行った。  
JST A-STEP 機能検証フェーズ:試験研究タイプ（12件申請、2件採択）、戦略的基盤技術高度化支援事業（1件採択）、いわて戦略的研究開発推進事業（2件申請）、岩手県地域イノベーション創出研究開発支援事業（8件申請、2件採択）、さんりく基金調査研究事業（7件申請、3件採択）
3. 国関係機関による個別相談会を開催し、教員等から研究内容の説明をした上で該当する公募事業の紹介や申請書作成のポイント等について助言を受け、活発な意見交換を行った。



イノベーションジャパン出展

### ● 地域企業等との共同研究・受託研究の推進

1. 研究シーズについて研究者が自らの言葉でわかりやすく説明し、視聴する地域企業等がその活用方法や適用分野をより具体的にイメージできる形の動画を製作した。
2. 研究成果が使用されるシーンを想定したイメージ図を記載することなどにより、地域企業等が抱える技術課題から最適な研究者を容易に探し出せる形のシーズ集を製作した。
3. コーディネーターを中心に企業訪問を実施し、ニーズ収集と同時にシーズ紹介を行った。また、本学や自治体等が開催する地域企業向けイベントにおいてシーズ集を配布するとともに、イベントの趣旨に合致するシーズや参加企業等に関連するシーズの紹介を行った。
4. 三陸復興・地域創生推進機構と日本政策金融公庫盛岡支店及びび一関支店は、本学の知見や研究成果等と中小企業等のニーズのマッチングを推進するため、「産学連携の協力推進に関する覚書」を締結した。



シーズ動画

産学連携シーズ集

### ● 産学官連携ネットワーク事業の企画・運営

1. 「いわて産学連携推進協議会（リエゾン-1）」の参画研究機関等によるパネル展示やリエゾン-1事業化育成資金贈呈企業による産学連携の取組事例など、幅広い情報を提供する機会を通じて東北地域の産学官連携を促進するため、マッチングフェア（フォーラム）を開催した。
2. 「いわて未来づくり機構」のラウンドテーブル及び企画委員会に事務局として参加した。
3. 北東北3大学3銀行提携による地域版 TLO「ネットビックスプラス」の本学における窓口として、銀行からの問い合わせへの対応、本学教員への提案（技術指導、共同研究の対応可否確認）と支援、北東北3県の産学官金連携イベント等での事業紹介を行った。



リエゾン-1 マッチングフェア

### ● 盛岡市産学官連携研究センター（コラボ MIU）の指定管理業務

1. コラボ MIU は、岩手大学の研究成果の企業への技術移転、新規創業支援及び研究開発型企業の誘致を推進するため、盛岡市が本学理工学部構内に設置したものであり、本学が指定管理者として、本機構の専門スタッフや試験・研究機器等のリソースを提供しながら、人的・物的に連携・機能分担して一体的に運営した。

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門

2. 自主事業として、MIU Cafe、地域イノベーションセミナー、イノベーションセミナー、地域連携フォーラム in 盛岡を実施した。
3. 岩手大学発ベンチャーでありコラボ MIU 入居企業の㈱エイシングが、平成 30 年度大学発ベンチャー表彰において経済産業大臣賞を受賞した。



イノベーションセミナー



大学発ベンチャー表彰

## ● 自治体との連携協定に基づく取組や提言の実施

1. 各地域における産学官連携の可能性について理解を深め、また、地域の様々な課題に対する具体的な取組事例を紹介する中から、地域・企業と本学との新たな連携につながる機会を模索するため、相互友好協力協定締結自治体のうち3市（盛岡市・釜石市・久慈市）において「地域連携フォーラム」を開催した。
2. 地域連携を中心とした本学のビジョンや第3期中期目標・中期計画期間における取組についての説明や意見交換を通じて相互理解を深めるとともに、地域と本学とのより広範で強い連携が図られることを目的に相互友好協力協定締結自治体との意見交換会を開催した。



地域連携フォーラム in 釜石



地域連携フォーラム in 久慈

## ● 地域課題解決プログラムの実施

1. 学生の積極的な地域社会への参画を促すため、地域社会（自治体や民間企業等）の抱える様々な課題を学生の研究テーマとして募集し、斬新な学生の視点から研究を行う「地域課題解決プログラム」を実施した。
2. 自治体等を中心に 52 件の地域課題の応募があり、本学教員からの 38 件の申請を審査した結果、29 件を採択し研究を実施した。また、年度末には、岩手県千葉副知事、保副知事参加の下、研究成果発表会を実施した。



地域課題解決プログラム研究成果発表会

## 【平成 31 年度の活動予定】

1. 地域創生モデル構築については、地域創生モデルとなり得る各部門の取組を検討会においてとりまとめ、それらの取組の見える化と普遍化を行う。
2. 組織的な産学官連携の推進については、銀河オープンラボの研究支援体制を整備し、学内外に向けて研究成果発表会やセミナーを開催する。また、重点支援研究プロジェクトを選定し、集中的に外部資金獲得の支援を行う。
3. 地域志向研究の促進については、機構の横断的プロジェクトである NEXT STEP 工房（学生による地域に関わる研究／活動プロジェクトを活発化することを目指す、地域活動／研究支援のプラットフォーム）を部門の活動に取り込み、導入のためのワークショップや成果報告会を開催する。

### スポーツユニオン

スポーツユニオンは、スポーツにかかわる地域のニーズや課題に対して大学のスポーツ資源をワンストップサービスとして対応するための組織である。部活の学生やスポーツ系の教員等がイベントや研修会に学生アシスタントや講師として活動している。また、スポーツを通じた地域づくりや総合型地域スポーツクラブの育成など多岐にわたっている。特に、国や東京都などの支援を受けて、地域の体育協会や教育委員会、日本のトップアスリートのネットワークなどと連携してスポーツを通じた震災復興を進め、まさに大学におけるスポーツを通じた地域貢献活動を担っている。

#### 活動テーマ と 概要

- ・ 住民が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境づくり
- ・ 地域の団体と連携した生涯スポーツの推進及び総合型地域スポーツクラブへの支援

代表者 教育学部：鎌田 安久

担当者 人文社会科学部：浅沼 道成、栗林 徹

教育学部：上濱 龍也、清水 茂幸、澤村 省逸、清水 将

スポーツ科学等の知見を基に競技スポーツへの技術的支援や地域住民の生涯スポーツの振興に向けた取り組みを進め、岩手県全体のスポーツ環境の整備に努める。併せて、子ども達にトップアスリートと触れ合う機会を提供し、スポーツを通じて夢を与える活動を充実させる。

#### 活 動 内 容

##### ● 住民が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境づくり

岩手県内の関係機関との協議を重ね、下記を構成メンバーとするスポーツの情報収集・発信や関係団体とのネットワーク推進、生涯スポーツ推進のコーディネーションを行うことを目的とする「いわて生涯スポーツ推進ネットワーク」を平成31年2月16日に発足させた。

○構成メンバー

【行政】岩手県、盛岡市 【スポーツ統括機関】(公財)岩手県体育協会、(一社)岩手県障がい者スポーツ協会、(特非)岩手県レクリエーション協会 【スポーツ関係団体】岩手県スポーツ推進委員協議会、岩手県総合型地域スポーツクラブ連絡協議会、岩手県スポーツ指導者協議会 【スポーツコミッション】いわてスポーツコミッション、盛岡広域スポーツコミッション、スポーツリンク北上、はなまきスポーツコンベンションビューロー

【高等教育機関】いわて高等教育コンソーシアム 【産業界】(株)岩手ホテル&リゾート

【外部協力機関】(一社)アスリートネットワーク、(一社)日本アスリート会議 事務局：岩手大学スポーツユニオン

##### ● 地域の団体と連携した生涯スポーツの推進及び総合型地域スポーツクラブへの支援

総合型地域スポーツクラブへの支援として、岩手県と共同主催で「平成30年度岩手県生涯スポーツシンポジウム」を平成30年11月17日に開催するとともに総合型地域スポーツクラブの効率的な運営を探ることを目的とした「平成30年度総合型地域スポーツクラブ支援セミナー」を平成31年2月16日に共に大学構内を会場に開催した。

## ● 東京 2020 公認プログラム Power up Japan from Tokyo2018 の実施

東京 2020 公認プログラム Power up Japan from Tokyo2018(主催：東京都、(一社)日本アスリート会議)をスポーツユニオンが主管し、陸前高田市と岩泉町において実施し、中学生がトップアスリートと触れ合える機会と場を提供した。



活動の様子



集合写真

### 【平成 31 年度の活動予定】

前年度発足させた「いわて生涯スポーツ推進ネットワーク」を通じて、持続的なスポーツ支援体制や支援策の検討を進めて行く。併せて、先導的な取り組みを進めている総合型地域スポーツクラブの事業モデル化を進める。また、従来実施してきた東京 2020 公認プログラム Power up Japan from Tokyo については、引き続き主管として事業を進めるとともに東京 2020 終了後に向け、東京都や(一社)日本アスリート会議との協議を進める。

## アートフォーラム

岩手大学アートフォーラムは、より地域に密着し、かつ国際的な視点を持ち、北東北固有の土壌を守り、深化した芸術文化の拠点としての役割を担うため、さまざまな活動を支援する目的で立ち上げたものである。具体的には、大学と地域を密接につなぐ5つのアクションとして「交わる・学ぶ・究める・創る・広める」という活動を通し、学内外の枠を越えて、共に学ぶことにより、新たな時代を読み解き、積極的に活動提案を進めていく。

▼Face book



### 活動テーマ と 概要

- 1 いわたの芸術文化活動を底上げし、牽引する人材の育成
- 2 地域住民・指導者・生徒のニーズに沿った活動を実施し、市民の芸術活動を促進
- 3 美術指導者の学び直しの場を提供

代表者 教育学部：藁谷 収

担当者 人文社会科学部：阿部 裕之、田中 隆充、玉澤 友基、木村 直弘、  
本村 健太

教育学部：牛渡 克之、金澤 文緒、溝口 昭彦、平野 英史

岩手大学アートフォーラムは、アートスクール窯芸コース、版画コース、指導者研修会（塑像彫刻）、いわて美術茶話を開催した。岩手大学内にある美術施設を活用した本格的なアート活動を展開し、地域に開かれた芸術文化の学びの場としての機能拡充を目指してきた。今後も岩手大学が保有する豊富な講師陣、恵まれた施設を利用し、地域で行われる芸術活動のサポートを進める。

## 活 動 内 容

### ● いわたの芸術文化活動を底上げし、牽引する人材の育成

「いわて美術茶話」の実施。いわての美術資源を活用して美術で人と人のつながりを広げることを目的とする対話型事業。平成28年度は岩手で活躍する美術に関する人々を招いて対話を進める双方方向性のあるイベントを実施。平成29～30年度は、参加者を広げ、中高校生が参加可能な実技体験を含んだ美術茶話も開催。

▼Face book



いわて美術茶話

## ● 地域住民・指導者・生徒のニーズに沿った活動を実施し、市民の芸術活動を促進

「岩手大学アートスクール」の実施。地域に開かれた芸術文化の学びの場として「アートスクール」を開校。学校教育の芸術環境の補完や向上、芸術に関心を持つ社会人、加えて芸術分野専門職等の継続的な学びの機会提供など、学習・創作・交流の場を提供し、岩手の芸術文化活動を底上げ、牽引する人材を育成することを目的に実施。



アートスクール版画 2018

▼Face book



## ● 美術指導者の学び直しの場を提供

「美術研修会」の実施。美術の指導者を育成する場。特殊なものについては、技術の講習を受けたくても受ける機会がないことから、美術指導者の学び直しの場として美術研修会を開催し、美術指導者のさらなる技術向上を図る。特に高校の美術教員を対象に実施。

▼Face book



## 【平成31年度の活動予定】

地域に開かれた芸術文化の学び場の提供として継続して「いわて美術茶話」を実施する。また、岩手の芸術文化活動を底上げし、牽引する人材の育成のため「岩手大学アートスクール」を、染織、木版画、彫刻の各分野で実施するとともに、美術指導者研究会（彫刻）を実施して事業を拡充する。今年度は、実施した事業については、参加者の満足度調査および分析を行い、今後の取り組みに反映させる。平成31年度は、生涯学習部門として活動する。



## 宮澤賢治センター

平成18年に発足した岩手大学宮澤賢治センターは、定例の研究会、宮澤賢治記念月例短歌会、賢治と音楽を楽しむ会などの恒常的な活動を積み重ねつつ、岩手大学と連携して「アザリアの花咲くとき 宮澤賢治と学友たち」展（2009年）、「関豊太郎と宮澤賢治 賢治が学んだ72の石たち」展（2011年）、大学出版部協会と共催して「賢治と語り合う21世紀の地域創生」（2016年）、そして賢治の盛岡高等農林卒業百周年には岩手大学農学部附属農業資料館と共催して「賢治卒業100年記念・地域創生フォーラム イーハトーブの学び舎から」（2018年）等の行事を開催してきた。

▼宮澤賢治センターHP



### 活動テーマ と 概要

#### ①宮澤賢治文学が一般市民の方々に一層親しまれるための 広場づくり

#### ②宮澤賢治文学に関する国内外の研究拠点形成

代表者 教育学部：大野 眞男

担当者 人文社会科学部：池田 成一、木村 直弘、山本 昭彦、小島 聡子  
教育学部：田中 成行、佐藤 龍一

広く岩手大学における宮澤賢治への関心を集約し、賢治と岩手大学との関わりを周知し、深め、発展させることを目的として発足した「岩手大学宮澤賢治センター」は、①宮澤賢治文学が一般市民の方々に一層親しまれるための広場づくり、②宮澤賢治文学に関する国内外の研究拠点形成を目指して活動している。今年度は宮澤賢治センターへの全学からの予算が打ち切られたため、宮澤賢治センターを岩手大学人文社会科学部附属のセンターとして位置づけるための調査を新たに行った外、『賢治学』発行、定例研究会の開催、そして教養科目「宮澤賢治の世界」開講等の活動を行った。センターについては、結果的に、令和元年度4月より、「岩手大学人文社会科学部宮澤賢治いわて学センター」として発足することになった。

## 活 動 内 容

### ● 定例研究会の開催

- ・平成30年度の定例研究会は、第99回（5月25日）第100回（7月20日）第101回（9月18日）第102回（11月22日）第103回（2019年1月30日）第104回（2019年3月20日）に開催され、平均で34名の参加者を集めた。
- ・平成30～32年度科研費の交付を受け、そのテーマ「宮澤賢治文学の国際的な普遍性と受容可能性に関する包括的研究」推進のため、第101回はインド・ジャワハルラル・ネルー大学から、第103回は中国・清華大学から、そして第104回はドイツ・ボン大学から、それぞれ外国人研究者を招聘した。
- ・ちなみに、第103回は教養科目「宮澤賢治の世界」と重ねることができ、結果的に、国際交流面からも、多くの受講生に大きな刺激を与えることができた。

## ●『賢治学』の編集・刊行

- ・昨年度に編集を終了した『賢治学』第5輯を東海大学出版部より2018年7月31日に刊行した。内容は、第5輯に寄せて、特集「賢治学の現代的展開」（地域創生フォーラム講演1本＋論考3本）、コラム「それぞれの賢治」（エッセイ1本）、宮澤賢治センター研究例会より（論考3本）、フォーラム「賢治学」（論文4本）、編集後記で、総214頁、ISBN：978-4-486-02177-3。
- ・この第5輯については、岩手日報が2018年8月31日付11面「文化欄」にて写真入りで紹介された。
- ・続いて年度内に『賢治学』第6輯を編集し終え、翌年度令和元年7月中に杜陵高速印刷出版部から刊行予定。特集は「賢治得業論文100年」。



アートスクール版画 2018



岩手日報 2018年8月31日（金） 11面 文化欄に掲載

▼賢治学 HP



## 【平成31年度の活動予定】

平成31年度より、岩手大学人文社会科学部の附属センターとして「岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター」が設置され、現在の「宮澤賢治センター」の活動等は、新センターに引き継がれます。

## (3) 生涯学習部門

部門長 朴賢淑(三陸復興・地域創生推進機構 准教授)

▼生涯学習部門 HP



生涯学習部門では岩手大学の「地域社会に開かれた大学」の理念の基、公開講座、社会教育主事講習、社会人学び直しプログラムなどを開講し、地域住民を対象に様々な学びの機会を提供することで大学の教育研究の成果を社会に還元している。近年、経済のグローバル化や社会変化に伴い人々の価値観も変化しており、成人学習者の関心も身近な課題から社会的課題へと移行しつつある。こうした状況を鑑み生涯学習部門では、多様な成人学習者が「学びをほどこき、編みなおす力」、「地域で生かす力」、「学び続ける力」などを身に付け、地域活動や職業生活で役立てることによって地域の生涯学習の振興を目指している。

### 活動テーマ と 概要

- 生涯学習基盤づくり
- 社会人学び直しプログラムの開発
- 地域課題セミナー（がんちゃんの学び）
- 社会教育主事養成
- 公開講座

部門長 三陸復興・地域創生推進機構：朴賢淑

部門員 人文社会科学部：浅沼道成、竹村祥子

教育学部：田代高章

理工学部：廣瀬宏一

農学部：佐藤和憲

三陸復興・地域創生推進機構：朴仙子

生涯学習部門では学内外との連携による生涯学習プログラムの開発に重点を置きながら、地域住民のニーズを反映した社会人学び直しプログラムの開発を中心に行った。また、岩手大学が進めるべき社会人学び直しプログラムのあり方を検討するために、シンポジウムの開催をとおして岩手大学の取り組みを全国に発信することができた。

## 活動内容

### ● 生涯学習基盤づくり

学内で開講している全ての社会人向けに講座（公開講座含む）をまとめてリーフレットを発行した。また、1年の事業の成果を報告書にまとめることで、岩手大学における生涯学習支援体制を整備し、生涯学習における岩手大学の成果をより広く周知することができた。

また、北東北三県の教育委員会、秋田大学、弘前大学の生涯学習担当者と協議を重ねることで北東北三県における生涯学習支援のネットワークを構築することができた。



平成30年度 生涯部門成果報告書



公開講座リーフレット

### ● いわてアグリフロンティアスクールとの連携事業

昨年度に引き続き、アグリフロンティアスクールの受講者を対象にコンピューター講座を実施した。当講座は、ハード面やソフト面に関する基礎知識を身に付けさせることを目的に行ったものである。具体的には、マウス・キーボードなどの基本的な操作、Word、Excelを使った文章の作り方を身に付けさせることで、まず受講者にコンピューターに慣れてもらうことに重点を置いた。今年度は5名が受講しており、いわてアグリフロンティアスクールのコース授業が始まる前に基礎知識を身に付ける補足講義を設けることができた。

なお、「いわてアグリフロンティアスクール」の受講生全員を対象に例年行われている授業評価のアンケートに加え、生涯学習ニーズのアンケート調査を行った。

### ● 社会人学び直しプログラムの開発

毎月部門会議を開催し、4学部からの部門員と共に地域ニーズにあった新たな社会人学び直しプログラムの開発のために調査・研究を行った。

また、平成28年度から始めた社会人学び直しシリーズの「がんちゃんの学び」を実施した。今年度は「地域」、「グローバル」、「アート」、「高齢者」、「子ども」をキーワードに開講することで、地域住民の学習ニーズを確認すると共に、受講者に地域課題を再考し、解決策を共に考える機会を提供することができた。

さらに、従来の公開講座の広報の仕方を検討するとともに、公開講座担当教員にインセンティブ経費を配分する際の評価指標を再検討することで、社会人学び直し講座への支援体制を構築した。

### ● 社会人学び直しシンポジウムの開催

部門事業の主な柱の一つとして社会人学び直しプログラムの開発を掲げており、平成30年度は共通の課題を抱えている東アジアを対象に調査研究を進めた。そこで、国際シンポジウム「東アジアの大学における社会人学び直し」を開催し、文部科学省による政策の動向を踏まえ、大変革の時代のなかでの東アジアの各大学における社会人受け入れの政策的取り組みと現状についてご報告いただき、国際的視点から大学における社会人教育の可能性について議論し、岩手大学の社会人の受け入れについて検討した。

シンポジウムでは、全国から参加した大学関係者と大学における社会人学び直しの政策の動向及び現状と課題を共有するとともに、ネットワークづくりができた。



社会人学び直しシンポジウムの様子



社会人学び直しシンポジウムポスター

### ● 地域課題セミナー「がんちゃんの学び」の開催

生涯学習部門では、地域の課題を地域住民と共有し、共に解決策を見出すために毎年企画講座「がんちゃんの学び」(シリーズセミナー)を開講している。今年度は「地域」、「グローバル」、「アート」、「高齢者」、「子ども」をキーワードに5つのシリーズ、16講座を開講している。各シリーズでは、国の政策を踏まえた上で、さらに、受講者との意見交換を通して地域課題について再確認することができた。また、当講座を通して成人教育の視点から大人が学んだものを実践に結び付けていくための条件とは何かについて検討を行った。

セミナーは平成30年9月から平成31年2月にかけて実施しており、合計140名受講した。



講義の様子

### ● 社会教育主事養成

生涯学習部門では、地域の社会教育の担い手となる専門的職員—社会教育主事の養成を行っている。文部科学省の委託事業である社会教育主事講習は、北東北の岩手県・青森県・秋田県の学習者を対象に岩手大学、弘前大学、秋田大学が持ち回りで開講している。

平成30年度は岩手大学が主催校となり、各大学、各県の教育委員会と連携を取り、学内外の教員の協力のもとで実施した。なお、講習は4週間の集中講義の形式で、4科目(9単位)開講した。

- ・実施期間：2018年7月17日～8月9日
- ・開講科目：生涯学習概論、社会教育計画、社会教育演習、社会教育特講
- ・参加者数：49名(青森7名、秋田12名、岩手30名)



演習の様子

会場	期日	8:50-10:20	10:30-12:00	12:00-14:30	14:40-16:10	16:20-17:50	
岩手大学 一橋会館 2階 大会議室	7月17日(火)			開講式	社会教育と生涯学習 岩手大学 村 賢哉 准教授 (生涯学習概論①)	社会教育と生涯学習 岩手大学 村 賢哉 准教授 (生涯学習概論②)	
	7月18日(水)	社会調査の倫理と方法 名古屋大学 丸山 和昭 准教授 (社会教育特講①)	社会調査の倫理と方法 名古屋大学 丸山 和昭 准教授 (社会教育特講②)	社会調査の倫理と方法 名古屋大学 丸山 和昭 准教授 (社会教育特講③)	社会調査の倫理と方法 名古屋大学 丸山 和昭 准教授 (社会教育特講④)	社会教育演習① 新妻・浅沼・村	
	7月19日(木)	生涯学習と学校教育 岩手大学 新妻 二郎 名誉教授 (生涯学習概論③)	生涯学習と学校教育 岩手大学 新妻 二郎 名誉教授 (生涯学習概論④)	生涯学習の意義 山形大学 安藤 頼己 准教授 (生涯学習概論⑤)	生涯学習の意義 山形大学 安藤 頼己 准教授 (生涯学習概論⑥)	社会教育演習② 新妻・浅沼・村	
	7月20日(金)	社会教育における評価 山形大学 安藤 頼己 准教授 (社会教育特講⑤)	社会教育における評価 山形大学 安藤 頼己 准教授 (社会教育特講⑥)	社会教育演習③ 新妻・浅沼・村	社会教育演習④ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑤ 新妻・浅沼・村	
	7月23日(月)	生涯学習と地域スポーツ 岩手大学 浅沼 謙成 教授 (社会教育特講⑦)	生涯学習と地域スポーツ 岩手大学 浅沼 謙成 教授 (社会教育特講⑧)	平泉文化と古代中国 岩手大学 網 海平 教授 (社会教育特講⑨)	社会教育事業計画 東北大学 高橋 謙 教授 (社会教育特講⑩)	社会教育事業計画 東北大学 高橋 謙 教授 (社会教育特講⑪)	社会教育事業計画 東北大学 高橋 謙 教授 (社会教育特講⑫)
	7月24日(火)	社会教育事業計画 東北大学 高橋 謙 教授 (社会教育特講⑬)	社会教育事業計画 東北大学 高橋 謙 教授 (社会教育特講⑭)	社会教育演習⑥ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑦ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑧ 新妻・浅沼・村	
	7月25日(水)	震災復興と行政の役割 岩手大学 五城 壮平 教授 (社会教育特講⑮)	社会教育演習⑨ 新妻・浅沼・村	学校外教育論 弘前大学 深作 祐郎 講師 (生涯学習概論⑦)	学校外教育論 弘前大学 深作 祐郎 講師 (生涯学習概論⑧)	学校外教育論 弘前大学 深作 祐郎 講師 (生涯学習概論⑨)	
	7月26日(木)	生涯学習とスポーツにおける運動学習 岩手大学 藤谷 巧子 准教授 (社会教育特講⑯)	社会教育施設としての「美術館」 岩手大学 藤谷 巧子 准教授 (生涯学習概論⑩)	地域社会と社会教育 弘前大学 松本 大 准教授 (社会教育計画①)	地域社会と社会教育 弘前大学 松本 大 准教授 (社会教育計画②)	地域社会と社会教育 弘前大学 松本 大 准教授 (社会教育計画③)	
	7月27日(金)	社会福祉と社会教育 岩手県立大学 櫻 泰典 准教授 (社会教育特講⑰)	社会福祉と社会教育 岩手県立大学 櫻 泰典 准教授 (社会教育特講⑱)	生涯学習関連産業の動向 実務者 (生涯学習概論⑪)	社会教育演習⑩ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑪ 新妻・浅沼・村	
	7月30日(月)	国際理解教育と生涯学習 岩手大学 原中 寛幸 教授 (社会教育特講⑲)	国際理解教育と生涯学習 岩手大学 原中 寛幸 教授 (社会教育特講⑳)	ジェンダーと社会教育 立教大学 岩間 穂子 教授 (社会教育特講㉑)	ジェンダーと社会教育 立教大学 岩間 穂子 教授 (社会教育特講㉒)	社会教育演習⑫ 新妻・浅沼・村	
	7月31日(火)	ジェンダーと社会教育 立教大学 岩間 穂子 教授 (社会教育特講㉓)	ジェンダーと社会教育 立教大学 岩間 穂子 教授 (社会教育特講㉔)	生涯学習と社会教育施設 秋田大学 坂 寿彦 教授 (生涯学習概論⑫)	生涯学習と社会教育施設 秋田大学 坂 寿彦 教授 (生涯学習概論⑬)	生涯学習と社会教育施設 秋田大学 坂 寿彦 教授 (生涯学習概論⑭)	
	8月1日(水)	社会教育と市民社会 岩手大学 村 賢哉 准教授 (社会教育特講㉕)	生涯学習と教育のグローバル化 岩手大学 村 賢哉 准教授 (社会教育特講㉖)	社会教育の広報・広聴 岩手県教育委員会 (社会教育計画④)	社会教育施設の経営 岩手県教育委員会 (生涯学習概論⑮)	社会教育演習⑬ 新妻・村	
	8月2日(木)	貧困問題と子ども支援 インクルーシブ 山崎 理恵 理事長 (社会教育特講㉗)	貧困問題と子ども支援 インクルーシブ 山崎 理恵 理事長 (社会教育特講㉘)	社会教育演習⑭ 新妻・村	社会教育演習⑮ 新妻・村	社会教育演習⑯ 新妻・村	
	8月3日(金)	青少年国際と社会教育 宮城県南上市教育委員会 上原 裕介 スキルアップ・イン・ア・ワールド (社会教育特講㉙)	青少年国際と社会教育 宮城県南上市教育委員会 上原 裕介 スキルアップ・イン・ア・ワールド (社会教育特講㉚)	青少年国際と社会教育 宮城県南上市教育委員会 上原 裕介 スキルアップ・イン・ア・ワールド (社会教育特講㉛)	青少年国際と社会教育 宮城県南上市教育委員会 上原 裕介 スキルアップ・イン・ア・ワールド (社会教育特講㉜)	社会教育演習⑰ 新妻・浅沼・村	
	8月6日(月)	生涯学習と社会教育職員 岩手大学 村 賢哉 准教授 (社会教育特講㉓)	社会教育演習⑱ 新妻・浅沼・村	生涯学習と教育制度 東北大学 袴藤 武博 准教授 (社会教育特講㉔)	生涯学習と教育制度 東北大学 袴藤 武博 准教授 (社会教育特講㉕)	社会教育演習⑱ 浅沼・村	
	8月7日(火)	社会教育演習⑲ 浅沼・村	社会教育演習⑲ 浅沼・村	社会教育演習⑲ 浅沼・村	社会教育演習⑲ 浅沼・村	社会教育演習⑲ 浅沼・村	
8月8日(水)	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村		
8月9日(木)	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村	社会教育演習⑲ 新妻・浅沼・村	閉講式				

平成30年度 社会教育主事講習日程表

## ● 公開講座の実施

生涯学習部門では地域に密着した社会貢献を目指しており、大学の研究成果を広く社会に還元するため全学で開講する公開講座を取りまとめ、実施経費の支援、受講者募集、成果報告を行っている。平成30年度も学内公募を通して、「自然観察・牧場体験」、「獣医学」、「農学」、「スポーツ」、「地域」、「理工学」など幅広い分野の19講座を開講することができた。また講義の質向上のため講習終了後受講者にアンケート調査を行うと共に授業担当者には活動報告書を提出してもらった。アンケート調査の結果及び活動報告は、平成30年度生涯学習部門成果報告書を参照されたい。なお、平成30年度開講したの公開講座一覧は下記の表の通りである。



講義の様子



▼公開講座 HP



	講座名	開催日時	対象者	募集人数	受講料	講義概要
自然観察・牧場体験	フィールドセミナー 春の植物観察会	2018年6月3日(日) 10:00~12:30	市民一般	15人	無料	滝沢湖自然公園内で平沢の森等を散策し、開花期を過ぎた春の樹木の観察と森林管理についての講話を通して、理解を深めていただきます。
	哲学者 内山 節 氏を詠えての 第13回「哲学の森」	2018年8月18日(土)~19日(日) 18日/13:30~17:00 19日/8:30~12:00	市民一般 (高校生以上)	30人	無料	滝沢湖自然公園哲学者内山節氏を詠え、森の中でこれからの社会や地域づくりのあり方などについて講演いただくとともに、森林散策・意見交換の機会を設け、様々な考えの場を提供します。
	牧場体験「子牛の誕生?トラクタに乗ろう」	2018年9月22日(土)~23日(日) 22日/13:00~23日/13:30	小学生以上の親子	25人	1,100円	西手大学駒崎牧場にて、牛の分娩を観察、農業機械を体験し、農業への理解、関心を持っていただきます。
	フィールドセミナー ウォッチングビンゴをしながら親子で楽しむ秋の森	2018年11月11日(日) 9:30~12:30	市民一般	20人	無料	滝沢湖自然公園ウォッチングビンゴをしながら森の樹木、草花、虫、鳥などを観察するセミナーを開催し、秋の森の様子、生き物の姿について理解を深めていただきます。
	かんじきをはいて冬の森を歩こう	2019年2月17日(日) 13:00~15:30	市民一般	30人	無料	かんじきをはいて冬の滝沢湖自然公園を散策し、自然観察・アニメイトラッキングなどを行います。春の森林と暮らしのつながりを通して、森林保全に関わる理解の深化を図ります。
	フィールドセミナー 春をむかえる森をみる	2019年3月24日(日) 9:30~12:00	市民一般	20人	無料	滝沢湖自然公園を歩きたての春の生きものを観察し、春をむかえる森の様子、生きものの姿について理解を深めていただきます。
中高生	半日獣医学学生体験 ~獣医学科はどんな勉強をするところ?~	2018年6月~7月の土曜日 または日曜日予定 13:00~16:00	中・高校生、 市民一般	100人	無料	獣医学、獣医学、畜産科の科目の履修体験を開催し、中高生にもわかりやすく説明します。また、実習の現場を見ていただくように、最終日にすることの出来る動物病院や肉質検査場などのバックグラウンドを解説します。
	農学部5学科(植物生命科学科・応用生物化学科・森林科学科・食料生産環境学科・動物科学科)の実験講座	2018年6月30日(土) 13:00~17:00	高校生および 高校教員	80人	無料	本講座を通して、教科書では学べない実験・実習の面白さや、農学への興味を持ってもらうと同時に、それぞれの進路の参考になることを期待します。
スポーツ	岩大スポーツアカデミー 2018 コーチのためのサッカーC	2018年7月~9月 9:00~18:00	18歳以上 (高校生未満)	30人	12,000円 参加費 教材費あり	サッカーの指導とついでに小学生の指導も行うようにして、サッカーの指導・指導は、その時サッカーに接する幅広い情報を提供し、指導力向上を目指して開催するものです。
	岩大スポーツアカデミー 2018 コーチのためのサッカーD	2019年2月予定 9:00~18:00			7,000円 参加費 教材費あり	また、本講座を修了・資格認定審査に合格した選手を育成するため、岩大サッカー協会より、山形日本サッカー協会公認「C級サッカーコーチ」、「D級サッカーコーチ」の資格を授与するものとします。
	岩大スポーツアカデミー 2018 少年少女のためのバスケットボール	2018年8月1日~3日 1日/17:00~18:00 2、3日/16:00~18:00	小学4年生~ 6年生	30人	無料	バスケットボールを愛し、学びたい少年少女に対して、レベル・目的に応じたプログラムを設け、実習の向上を目指し開催します。
	岩大スポーツアカデミー 2018 少年少女のための陸上競技	2019年1月~2月中旬予定 9:30~12:00	小学3年生~ 6年生	100人	無料	陸上競技を愛し、学びたい少年少女に対して、基本技術の習得と選手トレーニングなどについて、レベル・目的に応じたプログラムを設け、実習の向上を目指し開催します。
地域	地域政策入門 一生活と経済・環境一	2018年7月28日(土) 13:30~16:30	高校生、 市民一般	50人	無料	新設した地域政策課程での教育内容の一端を紹介し、広く本課程を知っていただくことを目的として開催します。本年度も地域政策に関するテーマを設定し、法学・経済学・環境学の3分野から話題を議論します。
	あなたは下戸(げこ)?それとも豚蛇(うわびみ)? ~DNA鑑定を用いた実験教室~	2018年秋の週末(1日) 予定 10:00~17:00	市民一般 (高校生以上)	8人	無料	ヒトのアルブミン遺伝子に対する遺伝子は遺伝的に決まっており、PCR-STRP(ポリメラーゼ連鎖反応-制限酵素断片長多型)分析というDNA鑑定法により、アルブミンを採取しなくても、強いか弱いかわかることができます。本プログラムでは、参加者の皆さん自身のDNAのPCR-STRP分析を通して、生命科学の基礎技術がどのように応用されているかを体験していただきます。
産学連携	ニワトリ胚を用いた研究は、ライフサイエンスに どのような貢献をきたしたか(ニワトリ初期胚の観察会)	2018年8月25日(土) 予定 11:00~12:30	市民一般	30人	無料	ニワトリ胚を用いた研究の歴史を解説した上で、主に基礎的分野に焦点を当てつつ、最新の研究成果をわかりやすく説明します。また、講演に引き続き、ニワトリ初期胚の観察会も行います。本講座は大館市カメリアホールを会場に、子供から大人まで幅広い方を対象に開催します。

公開講座一覧

## ● 共同研究員懇談会

盛岡市、久慈市、塩釜市では地元企業と岩手大学の共同研究を促進するため、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構に共同研究員を派遣している。生涯学習部門では、派遣された共同研究員と連携体制を構築し、各市町村における社会教育・生涯学習支援体制を図るため、共同研究員と懇談会を開催した。懇談会をとおして各市町村の社会教育行政および施設に関する情報を共有し、地域との連携を試みた。

## 【平成31年度の活動予定】

1. 市町村との連携の下で、地域のニーズに合った新たな社会人学び直しプログラムを開講する。
2. 事業の成果をセミナーの開催、学会での発表、報告書にまとめるなどで情報発信する。
3. 北東北三県の大学・社会教育担当者と連携を取りながら、遠隔教育システムの導入を視野に入れた生涯学習プログラムの開発研究を行う。
4. 企業・NPO・行政などとの連携を通じた地域人材の育成の可能性を検討する。
5. 社会教育施設職員の質向上のため、岩手県教育委員会、岩手県立生涯学習推進センターとの連携を通して、社会教育・生涯学習関係者を対象にフォローアッププログラムの開発に着手する。

## (4) 三陸水産教育研究部門

部門長 田中 教幸（農学部教授）



三陸水産教育研究部門は、三陸水産研究センターが担当する研究開発と大学教育による人材育成を主なミッションとする。平成28年度に開講された農学部食料生産学科水産システム学コースの学生教育を行うとともに、生産から加工、流通、販売システムモデルの構築を目指し、そのノウハウの普及と継続的なイノベーションの基盤設備に取り組む。

### ① 増殖分野

活動テーマ  
と  
概要

#### 岩手県沿岸における水産資源の持続的利用と新たな漁業生産体制構築を目指した東日本大震災からの復興支援

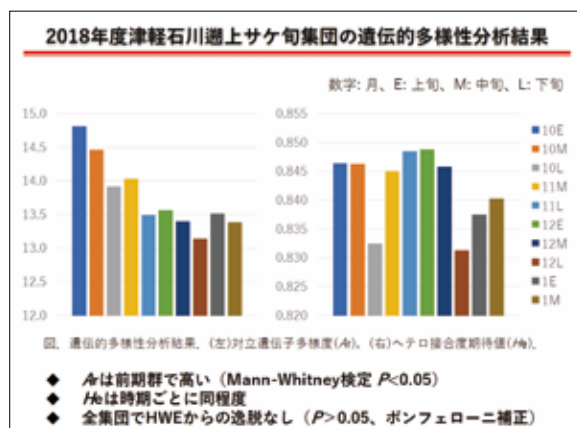
**代表者** 農学部：後藤 友明  
**担当者** 人文社会科学部：竹原 明秀、寺崎 正紀  
 教育学部：梶原 昌五  
 理工学部：伊藤 歩、石川 奈緒、松林 由里子  
 農学部：平井 俊朗、石村 学志、伊藤 幸男、後藤 友明、濱上 邦彦、塚越 英晴  
 三陸水産研究センター：北村 志乃  
 三陸復興支援課：田村 直司

学術・地域貢献・人材育成を通じた三陸における持続的な水産業の達成に増殖分野から貢献することを目的として、資源の持続的利用と新たな漁業生産体制の構築を主要なテーマとして活動を行っている。資源の持続的利用では、サケ・マスを代表する主要な三陸の漁業資源を対象として、資源学、生態学、集団遺伝学的なアプローチに基づき三陸における資源特性や東日本大震災以降の動向を把握している。新たな漁業生産体制の構築では、三陸で営まれている漁業や養殖業を対象として、持続的な漁業生産構造の達成に必要な資源管理技術や増殖技術について現状の分析に基づいて現状評価と問題解決に向けた研究を行っている。

### 活動内容

#### ● 岩手県沿岸河川に遡上するサケの遡上全期にわたる遺伝特性分析

サケ（シロザケ、*Oncorhynchus keta*）は三陸における重要な水産資源であるが、原因不明の回帰資源の減少が続いており、喫緊の課題となっている。岩手県のサケに関する遺伝学的分析はほとんど行われておらず、遺伝的要因の資源変動への影響を把握する必要がある。そこで、県下の遡上尾数を誇る津軽石川（11月以降の後期群主体）と安家川（10月までの前期群主体）をモデル河川として遡上時期を網羅した遺伝特性分析を行っている。平成30年度の津軽石川の結果においても10月下旬と11月上旬

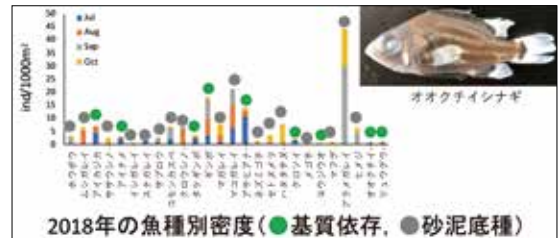


実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産教育研究部門	平泉文化教育研究部門	地域防災教育研究部門	ものづくり技術教育研究部門

の間に遺伝的分化がみられ、多様性は前期群で高かった（平成 27-29 年度までの結果と同様）。一方で安家川に関しては、多様性は前期群が後期群より高かったほか、匂ごとに分化している可能性があった。遺伝特性分析の結果は過去の卵移植の影響を受けていると考えられることから、卵移植の歴史を考慮しながら分析を続けていく。

## ● 東日本大震災後の三陸沿岸域における魚類相と主要魚種の加入動態把握

東北マリンサイエンス拠点形成事業を活用し、岩手県水産技術センターとの共同により野田湾と大槌湾で湾奥砂浜域での魚類採集調査を行い、震災以前を含む過去のデータとの比較から魚類相の特徴を明らかにし、その動向を調べた。大槌湾では、これまで東北地方太平洋沖地震津波に起因する魚類相の変化が認められてきたが、2018 年調査ではアマモ場に依存する魚種の回復がみられ、津波攪乱の影響は小さくなっていった。2018 年の主要魚種の加入水準は、ヒラメ当歳魚では野田湾で少なめであったのに対して大槌湾では多めであった。これに対して大槌湾におけるマコガレイ当歳魚は少なめであった。



## ● クロマグロ小型魚漁獲抑制試験

定置網揚網プロセスを活用したクロマグロ小型魚漁獲抑制試験を行い、平成 29 年度に日東製網株式会社、有限会社泉澤水産、岩手県水産技術センター、水産研究教育機構、東京海洋大学からなる研究チームでクロマグロと他の魚種を分離可能な分離落網を開発してその効果を把握した。その結果、本漁具改良により比較的高いクロマグロの分離効果が期待できることが示された。また、定置網揚網中の魚群行動観察から、クロマグロは他魚種よりも浅い層で単独の魚群を構成していることが示され、揚網過程終盤での網沈下が効果的であることが示唆された。平成 31 年度は再び水産庁による補助事業が採択され、さらに効果の高い放流技術の確立と成果の一般化に向けた試験を実施することとしている。



定置網に置けるクロマグロ小型魚混獲回避に向けた試験 (左から定置網揚網中に観察された網内のクロマグロ小型魚群、網上部脱出口から逃避するクロマグロ魚群)

## ● 外来種ヨーロッパザラボヤに関する基礎生物学的研究

三陸における貝類養殖に深刻な影響を及ぼす外来種ヨーロッパザラボヤを対象として、フィールド調査と飼育試験に基づいて成長、成熟、産卵特性の評価を行った。フィールド試験から、本種は初期成長後、2 ヶ月程度で最初の産卵期を迎えた後水温低下に伴い卵密度が低下するが、水温上昇に伴い再び成熟を開始した。産卵行動は成熟卵密度に依存して変化し、卵密度が一定の範囲内では水温刺激に誘発されるが、それを上回ると刺激を要せず行われると考えられた。また、複数個体間で連鎖的に産卵することにより繁殖の成功率を高めていることが示唆された。これらの成長、成熟および産卵特性は、本種が移入先で侵略的外来種として旺盛な再生産を行う特性を裏付けていると考えられる。



左からホタテガイ養殖ロープに付着したヨーロッパザラボヤ、試験用ホタテガイ貝殻基質に付着したヨーロッパザラボヤ

## 【平成 31 年度の活動予定】

- 1 資源の持続的利用
  - (1) サケ類資源の持続的利用のための三陸岩手サケの生物特性の研究
  - (2) 沿岸漁業資源生態学的研究
  - (3) その他研究、湾内磯根資源の持続的利用など
- 2 水産資源増殖の高度化による新たな漁業生産体制の構築
  1. クロマグロ小型魚漁獲抑制試験
  2. マボヤ人工種苗生産に関する研究
  3. 外来種ヨーロッパザラボヤの生態に関する研究
  4. アカモクの持続的利用と種苗生産技術開発
  5. 東日本大震災後の漁業復興に関する研究



## ② 養殖分野

### 活動テーマ と 概要

- ① 三陸沿岸域に適合しうる陸上養殖システムの開発
- ② 三陸沿岸域に適合しうる新規養殖対象種の開拓
- ③ ①、②を通じた、岩手大学学部生・大学院生の  
実地型教育と地元産業界への啓発活動

**代表者** 農学部：平井 俊朗

**担当者** 教育学部：梶原 昌五

理工学部：伊藤 歩、石川 奈緒、松林 由里子

農学部：伊藤 幸男、後藤 友明、濱上 邦彦、塚越 英晴

三陸水産研究センター：佐藤 琢哉

三陸復興支援課：田村 直司

海面漁業生産を補完しうる市場競争力を持った陸上養殖技術確立のための研究の端緒として、生食可能な海産サーモンとして希少性の高いサクラマス  
の陸上養殖試験を実施した。また、地域企業との連携のために設立された「  
次世代陸上養殖システムによるフィッシュファクトリー創造プラットフォーム」  
(釜石プラットフォーム)に参画し、研究開発事業設立に向けた活動を行っ  
た。特にその一環として、岩手と同様にサーモン養殖による地域創生を  
目指す複数の地域と連携して「ご当地サーモン」をテーマとした全国規模の  
シンポジウムを開催した。さらに、かつて釜石地域を中心に展開されていた  
チョウザメ(キャビア)養殖復活に向けて、その基盤となる種苗安定生産に  
関して地元有志企業と共同研究を本格化させた。以上の様に魚類養殖による  
地域イノベーションに向けた基盤形成を着実に進展させている。

## 活 動 内 容

### ● サクラマス海水養殖試験

前年度海水飼育した岩手系サクラマスの中で成長の良い個体を県内水面水産技術センターに移送し、これを親魚として次世代を作出し、優良系統作出に向けた育種研究を開始した。新たに岩手系ならびに近畿大学富山系サクラマスを移入し、海水飼育試験を継続中であり、富山系については次年度初頭に地元外食事業者(ヒカリ食堂)との連携により、試食メニュー開発による市場性評価を実施予定である。加工・マーケティング分野との共同で肉質評価研究のための予備試験を実施し、学会発表2件を行った。

### ● ニジマス(トラウトサーモン)海水養殖試験

国内におけるサーモン養殖に関する機運の高まりの中で、ギンザケに替わる養殖対象種として期待されているニジマスについて、開発が待望されている海水養殖高適合性種苗の開発に向けて、北海道大学、岩手県内水面水産技術センターとの共同研究により、降海型ニジマス(スチールヘッド)と関連系統の海水飼育試験を開始した。これをもとに来年度、岩手県事業としてニジマス優良系統作出に関する共同研究の開始が内定した。宮崎大学、宮崎県水産試験場との共同で、宮崎県保有の高温耐性系ニジマスの海水飼育試験を開始した。

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門

## ● 高濃度酸素溶解装置による養殖生産性向上に関する基礎研究

株式会社巴商会との共同研究の下、平成30年度さんりく基金調査研究事業助成金に応募・採択され、当該研究を実施した。サクラマスならびにニジマスを用いて、密度ほかの飼育条件が水質ならびに魚体の生理状態に及ぼす影響について調査し、高濃度酸素溶解装置による高密度飼育（生産性向上）の可能性を検証した。当初期待していた成長促進効果は確認できなかったが、陸上養殖高度化に向けて今後研究すべき問題点を明らかにすることが出来た。これを受けて次年度に後継課題によるさんりく基金基金調査研究事業助成金応募を目指す。これらの成果により、学会発表1件を行った。

## ● 新規養殖対象魚の開発（サケマス類）

岩手県内水面水産技術センターとの共同研究により、成熟による養殖魚の肉質低下防止策としてサクラマス不妊化处理（3倍体化）魚の作出を試みたが、十分な成績を残せなかった。今後、さらに処理条件等の検討を継続する。また、ニジマス等でも3倍体魚の海水飼育特性の検証を行う予定である。北海道大学水産学部との共同研究により、新たな養殖魚としてのサケ科雑種魚の可能性を検証した。今年度はサクラマス×シロザケの雑種について海水飼育試験を実施し、雑種魚はシロザケ（母方）と同様に孵化後数ヶ月の時点で完全に海水適応できることが明らかとなった。またシロザケ2倍体と比較して有意に高い成長性が確認された。現在、飼育試験を継続中で今後、学会発表、論文投稿を目指す。

## ● 新規養殖対象魚の開発（チョウザメ）

近年、国内各地でチョウザメ（キャビア）生産とそれを基にした地域振興に注目が集まっていることから、清水川養鱒場（八幡平市）、岩手県内水面水産技術センター、北海道大学との共同で、チョウザメ種苗生産に向けた共同研究を開始した。清水川養鱒場所有のアムールチョウザメ雌魚から震災後初めてチョウザメ稚魚の生産に成功した。ただ、雌親魚から得られた卵の卵質が不良であったため、孵化率、正常発生率ともに十分とは言えず、次年度の種苗生産に向けて雌親魚の養成条件の再検討を行うこととした。また、熟練技能者の経験に負うところが大きい卵質評価の自動化に向けて、情報科学分野の研究者との連携を進め、外部資金獲得を目指すこととした。

### 現在までの 取り組み状況①

#### 親魚候補選定作業 (清水川養鱒場)



チョウザメ親魚候補（アムールチョウザメ）



成熟確認のため針を刺して卵採取（2018.4.26）

チョウザメは数年に一度しか産卵しないため、卵巣組織の一部を取り出してその年に産卵可能な雌を選別する。

### 現在までの 取り組み状況②

#### 人口排卵誘導・ 採卵・人工授精 (清水川養鱒場)



採卵作業（2018.5.22）



飼育中の稚魚（全長約5cm）（2018.8.10）

国内の養殖環境では自然産卵はほぼ起こらないため、**ホルモン投与**による排卵誘起が重要となる。また、孵化後数ヶ月は稚魚の死亡率が高いためこの時期の**育成技術の確立**（初期餌料など）も重要である。

### ● 複合養殖システムに向けた研究

近年各地で注目されている、農業廃棄物を利用した磯焼け対策駆除ウニの畜養の岩手県における可能性を探るべく、(社)岩手県栽培漁業協会 種市事業所より放流規格外ウニ種苗の提供を受け、野菜くず給餌による予備試験を行った。約1年間の飼育試験の結果、野菜くずなどの家庭残菜のみでウニは成長し、可食部である生殖巣も発達することが確認された、また同じ水槽に同事業所より分与を受けた放流規格外稚ナマコを混養したところ、ウニの排泄物を摂餌して、成長することが確認された。

### ● 地域固有の立地条件を活かしたシーズ開拓

地域固有の立地条件を活かしたシーズ開拓研究として、岩手大学演習林(滝沢、御明神)におけるサケマス類繁殖(育種)関連教育・研究施設整備、三陸沿岸域における海面養殖実習施設設置、の可能性について、岩手大学農学部寒冷フィールドサイエンス教育研究センターならびに新おおつち漁協との折衝を行った。残念ながら、両所とも現状ではクリアできない問題点があるため、実習施設設置には至らなかった。今後、釜石プラットフォームの参加団体とも協議をしながら、他の候補地について調査、折衝を継続することとなった。

### ● 地域振興型水産関連教育研究施設の全国連携に向けた取り組み

地域企業との連携のために設立された、「次世代陸上養殖システムによるフィッシュファクトリー創造プラットフォーム」(釜石プラットフォーム)に参画し、研究開発事業設立に向けた活動を行った。サケマス類海水養殖による地域の新たな水産業態創生に取り組んでいる研究機関(近畿大学、宮崎大学、北海道大学、金沢大学ほか)との産地間連携に向けた共同研究へと結びつけるべく、意見交換を行った。前年度の近畿大学に続いて、宮崎大学、北海道大学、愛媛大学、九州大学の養殖関連研究者を釜石プラットフォーム勉強会に招聘した。さらにご当地サーモンシンポジウム(下述)を主催し、サーモン養殖に係わる幅広い分野の交流を推進した。

### ● サーモン養殖に関する全国シンポジウム主催

農研機構・生研支援センター「革新的技術開発・緊急展開事業(うち技術開発・成果普及等推進事業)」に採択され、岩手大学復興祈念銀河ホールほか(4会場中継;参加者総数約200名)において、シンポジウム「国内サーモン養殖による地域振興に向けた課題と展望~地域発サーモン養殖を支える研究開発の方向性~」を開催した。地域振興の観点からご当地サーモンに注目し、生産事業者(成魚育成、種苗供給)のみならず、関連する加工・流通事業者、さらにはサーモン養殖による地域振興を検討している団体などが一堂に会し、生産現場の抱える問題点とその解決に向けた展望と、今後、大学や試験研究機関が担うべき研究開発の方向性を議論した。事業報告書を作成し、特集記事を業界誌、月刊養殖ビジネスに掲載した。



盛岡メイン会場  
(復興祈念銀河ホール)

NTTドコモ協力(ネット会議システム)活用により  
3サテライト会場(盛岡、函館、延岡)に相互配信

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門



**基調講演**  
国内サーモン養殖による地域振興に向けた課題と展望  
～地域発サーモン養殖を支える研究開発の方向性～  
全国養鯉振興協議会・小堀会長



**ポスターセッション**  
(銀河ホール 2Fホール)

26演題（連携支援関連2件、養殖生物関連6件、養殖施設  
関連6件、養殖事業関連5件、食品関連6件、経営関連2件）  
広範な分野の関係者が一堂に会して新たな連携の契機に！



**NTTドコモ**  
一次産業支援技術展示ブース

## ● 岩手大学学部生・大学院生の実地型教育と地元産業界への啓発活動

本年度9月の水産システム学コース一期生釜石移行に際して、増殖分野との協同の下、卒業研究の一環として三陸沿岸域の増養殖関連事業者への見学・実習を行った。養殖分野としては、平井研究室配属学生4名が宮崎大学との共同研究の一環として、唐丹漁協片山川ふ化場にてシロザケ採卵・人工授精作業に従事した。将来的な釜石独自開講カリキュラムの候補とすべく、漁協との交渉を開始した。また、釜石プラットフォームの養殖事業勉強会に関連分野の学外講師4名を斡旋し（上記）、平井研究室配属学生4名に聴講させた。さらに生研センター革新的技術開発・緊急展開事業（うち技術開発・成果普及等推進事業）によるご当地サーモンシンポジウム（上述）を主催し、平井研究室配属学生4名にもその運営に参画させ、関係者との意見交換を行った。

### 【平成31年度の活動予定】

- ① 三陸沿岸域に適合しうる陸上養殖システムの開発
- ② 三陸沿岸域に適合しうる新規養殖対象種の開拓

これまでの研究活動を継続するとともに、新規研究シーズの探索を行う。

- ③ 岩手大学学部生・大学院生の実地型教育と地元産業界への啓発活動

釜石キャンパスにおける農学部水産システム学コースの専門教育（卒業研究ほか）本格化し、釜石キャンパス開講科目の実現に向けて注力する。

研究成果の事業化による地域創生に向けて、釜石プラットフォーム会員団体との連携を加速させ、外部資金獲得を目指す。

### ③ 加工・マーケティング分野

活動テーマ  
と  
概要

- ①水産物をベースにした高付加価値化・機能性食品の開発
- ②特定の三陸漁業者を対象としたワークフロー・バリューチェーン最適化実証実験と汎用性ある水産業6次産業化モデルの構築
- ③三陸ブランドの海外展開と次世代養殖を基軸とした6次産業化
- ④研究活動を通じた岩手大学学部生・大学院生の実地型教育と地元産業界への啓発活動

代表者 農学部：田中 教幸

担当者 人文社会科学部：田中 隆充、横山 英信

理工学部：高木 浩一、萩原 義裕、廣瀬 宏一、船崎 健一、  
小野寺 英輝、三好 扶、吉野 泰弘、

農学部：上村 松生、塚本 知玄、平井 俊朗、三浦 靖、山下 哲郎、  
石村 学志、伊藤 芳明、袁 春紅、山田 美和

三陸水産研究センター：于 克鋒、紺野 充弘

三陸復興支援課：田村 直司

地域の水産資源の価値向上と新たな価値を科学的根拠に基づいて創造して市場拡大を図り、地域経済の好循環創造に貢献して、復興と地域創生に資することを目指す。

新しい加工技術開発による高付加価値化・機能性食品の開発や省力化、ワークフロー適正化やバリューチェーン最適化による生産性向上や収益率の向上を通して専門職業人の雇用機会創出を確立することとし、海外との連携も水産業先進地の北ヨーロッパ、有望な水産物消費地の東南アジアを主な対象に学術・技術交流と教育・人材育成交流を推進する。

### 活動内容

#### ● 水産物をベースにした高付加価値化・機能性食品の開発

釜石湾漁協、有限会社泉澤水産の協力を得て、漁獲した活サバを当センターの水槽で蓄養後、レアしめ鯖の試作を行った。官能評価、筋原繊維タンパク質のATPase活性と塩溶解度また筋肉のATP関連化合物の組成変化の分析により得られた最適な条件で、さんりく基金商品開発事業の一環として「鯖サミット2018」に釜石ヒカリフーズ株式会社から商品化した「ほぼシメサバ」を出品し、高い評価が得られた。また高齢者向けの栄養強化食品においてホタテ入りライスまたアイスクリームの開発を行い、栄養成分を分析した。通常のライスよりタンパク質は約2倍増加したが、炭水化物含量は約1/3に低下した。また三陸特産品のイサダの原料特性の解明と、pH、ATP関連化合物濃度の時間変化を分析した。



センターの水槽で蓄養中のサバ

## ● ホタテ流通における最適化実証実験と6次産業化モデルの構築

市販のホタテは海水蓄養または殻なしの無海水冷蔵状態で流通される。冷蔵中の鮮度に対する漁獲後処理の効果を比較し、ホタテの鮮度と品質を保つための科学的証拠を得ることを目的に分析した。活ホタテを入手し、4時間以内に研究室に運び、冷蔵(4℃)保存における海水での保管(湿式貯蔵)、海水なしの保管(乾式貯蔵)および貝柱のみの各保存法の鮮度変化について調べた。活ホタテ貝柱肉のATP含有量は最初に増加し、2-4日目まで一定の量(5 mM前後)を維持した。また貯蔵中にAEC(アデニルエネルギー価)値は0.7-0.9の範囲であった。Ca<sup>2+</sup>-ATPase活性および塩溶解度の変化は各グループの間に顕著の違いが見られなかった。研究結果から総合的な鮮度評価の必要性、また新たな鮮度評価方法を構築する必要性が示唆された。今後得られた知見に基づき、最適なホタテ流通方法の構築を目指す。



ホタテレオロジー特性測定

## ● 陸上養殖サクラマス肉質分析およびイサダの有効利用に関する研究

岩手大学三陸水産研究センターの陸上飼育施設による生産魚の高付加価値化のために養殖環境と品質との関連に着目して、従来の官能評価に加えて品質特性を機器分析等による客観的な品質評価を行った。異なる飼育条件下での生産魚の肉質について、肉の旨み成分、硬さ、色、脂の乗り具合などを数値化した官能評価および遊離アミノ酸分析に供した。飼育試験魚に加えて、比較対象として市販のチリ産トラウトサーモンなど4種類を使用して分析を行った。またイサダを材料としたの高品質食材の開発を目的としている研究を行っている。凍結解凍実験、酸素遮断実験、ATP含有量を指標としてイサダの鮮度変化の分析を行った。そのほか、釜石魚市場サバの調査、しめ鯖の試作、真空マイクロ波によるアニサキスの死滅実験を行った。



サクラマス肉質評価

## 【平成31年度の活動予定】

イサダとホタテを用いた高品質食材の開発に向けてイサダまたはホタテの保存条件による鮮度変化を調べる。異なる冷凍、解凍方法における鮮度変化を調べるため、指標としてATP含有量などを分析する。また引き続き、異なる条件下での陸上養殖サクラマスの肉質を評価するため肉の組成成分を調べる予定である。

さらに、新規課題として地域の水産企業の課題に取り組む予定である。流通における冷凍牡蠣の品質低下が著しいため、異なる保存条件下での牡蠣の成分変化を調べる必要がある。品質劣化の評価における冷凍または解凍方法による遊離アミノ酸などの成分変化を調べる。また寄生虫アニサキスを死滅させる有効な方法を調べる予定である。

## (5) 平泉文化教育研究部門

部門長 宇佐美 公生 (教育学部 教授)



平泉文化教育研究部門は、平泉文化研究センターが担当している。センターの目的は、仏国土(浄土)の理想郷として造営されたという平泉庭園文化を中心に平泉文化の意義を総合的に解明することにある。具体的には岩手県教育委員会や海外の諸大学等と連携を図り、これまでの研究成果を踏まえながら平泉文化を学術的・国際的な観点から研究し、平泉文化の国際的意義を明らかにし、「平泉学」として総合化を目指していく。

平泉文化教育  
研究部門 HP



### 活動テーマ と 概要

### ・ 平泉文化の普遍性に関する国際理解の一層の進展と 地域に遺る文化遺産を活かした地域振興への貢献

**代表者** 教育学部：宇佐美 公生  
**担当者** 人文社会科学部：玉澤 友基、久保田 陽子  
 教育学部：佐藤 由紀男、菅野 文夫、藪 敏裕、今野 日出晴、  
 境野 直樹、田中 成行  
 理工学部：平原 英俊、會澤 純雄、小野寺 英輝  
 農学部：伊藤 菊一  
 平泉文化研究センター：劉 海宇、藤崎 聡美、藤原 歩

考古研究部門・文献学的研究部門・教育地域貢献部門の三部門を中心に活動を行った。内容は以下の通り。

1. 「岩手県における世界遺産についての調査・研究の継続と支援」では考古部門を中心に東アジアにおける古代庭園比較研究を、文献部門を中心にシンポジウム「中尊寺供養願文の謎を解く」及び東アジアにおける仏塔信仰と經典埋納研究等の平泉文化総合研究を行った。
2. 「平泉世界遺産教育の展開」では平泉世界遺産登録7周年記念講演会や「平泉学講演会」への協力等を行った。
3. 「地域創生関係」では平泉文化セミナー8回・公開講演会3回、シンポジウム2回・陸前高田市「産金の始まり」等の連携を行った。
4. 「世界遺産活用のあり方(モデル化)の確立」では釜石市「鉄の歴史講座」の開催(2回)等を行った。

### 活 動 内 容

#### ● 考古研究部門：「東アジアの平泉を考える」国際会議

10月13日に平成30年度UURR事業の一環として、洛陽市文物考古研究院の研究者2名を招へいし、岩手大学平泉文化研究センター・岩手県・平泉町教育委員会・中国洛陽市文物考古研究院の共催で岩手大学において「東アジアの平泉を考える」国際会議を開催した。張如意氏は「洛陽における隋唐期の園林遺跡」、屈昆傑氏は「洛陽の平泉遺跡調査報告」、千葉信胤氏は「歴史資料としての平泉地名研究」、伊藤博幸氏は「日本国内の平泉寺について」をテーマにそれぞれ発表した。



「東アジアの平泉を考える」  
国際会議



## ● 考古研究部門： 「東アジアにおける古代都城と庭園」講演会

12月14日に中国社会科学院考古研究所の趙海濤氏を招へいし、「二里頭都邑における近年の考古新発見及び新認識—中国初期王朝都城遺跡—」をテーマに、「東アジアにおける古代都城と庭園」講演会を開催した。今から約3800年前の中国初期王朝都城の二里頭遺跡における集落形態の形成及びその変遷について分析し、また宮殿区の東北部に祭祀機能を持つ巨大な土坑の新発見等も紹介することで、二里頭遺跡1期から4期後半まで二里頭文化は継続したが、その後遺跡は破壊され、同時に一部地域では大型建築が改めて造営されており、外族の侵攻と王朝交代によるものだと推測されるとの結論を示した。



「東アジアにおける古代都城と庭園」講演会



## ● 文献学的研究部門： 「平泉文化研究会および第2回経塚研究会」

平泉・柳之御所遺跡の発掘調査を契機とし、急速に進展した平泉文化研究の一つとして仏教史研究があるが、今回は主に平泉の「寺院と法会」をテーマとした研究報告会を催すこととなり、また2014年に東北大学で開催された東アジア的視点での経塚研究会以降、3カ年におよぶ中国・韓国調査が実施され、併せてその研究報告会も催すことで、7月22日に東北大学で「平泉文化研究会および第2回経塚研究会」を開催した。上島亨「平泉の寺院と法会」・菅野成寛「東アジアの経筒と仏塔信仰の転生」・劉海宇「中国・唐宋期の法舍利埋納について」・石黒ひさ子「広東省南華寺出土遺物について—「広州綱首」をめぐる—」・八重樫忠郎「東北地方経塚の特性をめぐる」の報告が行われた。



「平泉文化研究会および第2回経塚研究会」



## ● 文献学的研究部門： シンポジウム「中尊寺供養願文の謎を解く」

中尊寺供養願文は、平泉藤原氏を研究する上で貴重な史料としてよく知られ、ただし近年では鎌倉末期の偽作とする説も登場するなど、願文をめぐるさまざまな研究課題が残されている。供養願文調査の成果と最新の知見をもとに、願文の謎を解きその価値を再発見する場として、3月23日にシンポジウム「中尊寺供養願文の謎を解く」を平泉町平泉文化遺産センターで開催し、柳原敏昭「供養願文の原本調査—成果と課題—」・菅田慶信「中尊寺供養願文の作法」・劉海宇「中尊寺供養願文と藤原朝隆—書の視点から—」・菅野文夫「供養願文が模写された時代—信濃阿闍梨行円の思い—」・菅野成寛「中尊寺供養願文と藤原敦光—願文は二セモノ、ホンモノ?—」の報告が行われた。



シンポジウム  
「中尊寺供養願文の謎を解く」



## ● 考古研究部門：第二回中国考古学大会等での研究発表

平成30年度教員の海外渡航支援経費を利用して、劉海宇教授は、10月18日～20日に中国維坊で行われた、北京大学と山東省文物考古研究院主催の青銅器・金文與齊魯文化學術研討会で「西周金文『執駒』及び詩経相關内容考述」をテーマに、10月22日～23日に中国成都で行われた、中国社会科学院考古研究所主催の第二回中国考古学大会で「西周金文“王在周”所及建築考述」をテーマに、それぞれ口頭発表した。



第2回中国考古学大会等での研究発表





● **考古研究部門：『貿易陶磁と東アジアの物流』  
刊行に係る記念講演会の開催**

2019年2月9日に、平泉文化研究センターが監修した『貿易陶磁と東アジアの物流—平泉・博多・中国』の出版を記念し、編者の一人である徳留大輔氏を招へいして「平泉から出土した中国陶磁の産地推定に関する国際共同研究成果報告」を題とした講演会を開催した。本講演会では、福岡市の博多遺跡群で出土した資料の分析結果も含めてご報告し、平泉で出土する中国産陶磁がどこで作られたものであったのかを明らかにするとともに、新しく分かった課題についても紹介した。



『貿易陶磁と東アジアの物流』  
刊行に係る記念講演会



● **考古研究部門：  
平泉世界遺産登録7周年記念講演会の開催**

6月23日に、平泉世界遺産登録7周年を記念して、岩手県との共催で盛岡市遺跡の学び館研修室で元奈良文化財研究所長田辺征夫氏を招へいして「考古学から見た「京」の成立・変遷と平泉」を演題に、平泉記念講演会を開催した。2011年6月に世界文化遺産に登録された平泉は、仏国土（浄土）を表す建物・庭園や遺跡群の高い価値が認められ、古代から中世への転換期、京の都からはるか遠く離れた平泉の地に花開いた都市文化は、明らかに異彩を放つものであった。本講演は、平城京で完成したとされる古代都城の特質を中心に、その後の平安京における変貌を見据えて、平泉の魅力を探るものである。



平泉世界遺産登録7周年  
記念講演会会場の様子



● **教育・地域貢献部門：  
第19回 平泉文化フォーラムの開催**

第19回平泉文化フォーラムが平成31年2月2日（土）・3日（日）に奥州市江刺体育文化会館に於いて岩手大学平泉文化研究センター等の四機関の共同主催で開催され、延べ350名が参加した。初日は、講演に先立ち、主催者側として岩淵明学長があいさつを行い、「平泉は我々にとって大いなる遺産であり、後世にどう伝えていくかが大切」と保存活用的重要性を強調した。本センターの劉海宇教授が「中尊寺金銀字一切経のルーツについて」をテーマに、共同研究発表を行った。基調講演・最新の発掘報告及び共同研究成果などを通じて平泉文化に理解を深めることができ、充実した2日間のフォーラムとなった。



第19回 平泉文化  
フォーラム



● **教育・地域貢献部門：  
第40回 平泉文化セミナー例会の開催**

4月27日に、センター客員教授の八木光則氏による「本州における擦文土器出土の意味について—平泉出土の擦文土器に寄せて—」例会を開催した。本報告では、平泉町出土の擦文土器に関連して、擦文土器研究の現状を概観した。北海道における編年の到達点と東北北部の擦文土器の分布を確認し、古代北方交易のルートの変化、平泉期における奥大道の成立と蝦夷地との交易の痕跡を探り、平泉町出土の擦文土器の課題についても触れた。



第40回 平泉文化  
セミナー例会



実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門

## ● 教育・地域貢献部門：第41回 平泉文化セミナー例会の開催

5月30日に、盛岡大学文学部教授・当センター客員教授大石泰夫氏によって、「蘇民祭のコマ木と剛卯と」をテーマに、例会を開催した。岩手県南地方には、旧暦の年頭行事として蘇民祭が伝えられる。平泉においても、「延年の舞」で有名な「毛越寺二十日夜祭」にも、蘇民祭の要素が伝えられ、寺院としての「修正会の結願行事」に蘇民祭が集合したものと見ることができよう。この蘇民祭という祭礼だが、その実態がよくわかっていない。この「卯槌」とあわせて「卯杖」というものが伝わり、その元になるものが中国の「剛卯」とされている。本発表では、蘇民将来の伝説は、中国伝来の伝説とされるが、どうもその呪物である「コマ木」も中国の「剛卯」と脈絡がありそう、そうした諸相を報告しつつ、蘇民祭に伝わる「コマ木」の信仰を明らかにする。



第41回 平泉文化  
セミナー例会



## ● 教育・地域貢献部門： 「産金のはじまりー気仙と黄金文化平泉」講演会の開催

11月18日(日)、当センターが主催する2018 陸前高田グローバルキャンパス事業として、「産金のはじまりー気仙と黄金文化平泉」講演会が陸前高田グローバルキャンパスにて開催された。講演会では、宇佐美公生センター長があいさつしたのち、八木光則氏(岩手大学平泉文化研究センター客員教授)による「気仙の古代」、曳地隆元氏(陸前高田市教育委員会学芸員)による「気仙地方の産金遺跡と平泉」、伊藤博幸氏(岩手大学平泉文化研究センター客員教授)による「平泉の黄金文化」という講演が行われた。講演会には、地元の歴史愛好家を中心に、県内の関係者30名近くが参加し、陸前高田市における古代の産金と平泉の黄金文化について興味深く受講した。



「産金のはじまりー気仙と  
黄金文化平泉」講演会



## ● 教育・地域貢献部門：釜石市立図書館市民教養講座 「鉄の歴史講座」の開催

11月25日、岩手大学平泉文化研究センター、岩手大学三陸復興・地域創生推進機構、釜石市立図書館の共催で釜石市立図書館市民教養講座「鉄の歴史講座Ⅰ」が同市図書館2階視聴覚室にて開催された。講座では、はじめに釜石市立図書館の高橋悦子館長が挨拶したのち、同市世界遺産課係長の森一欽氏の進行で、劉海宇氏(平泉文化研究センター教授)による「東アジアの鉄の歴史の話」、八木光則氏(平泉文化研究センター客員教授)による「古代・中世の岩手県の鉄生産の歴史ー沿岸部を中心に」という講義が行われた。講座には、地元釜石市はもとより、山田町などからも歴史愛好家を中心に、約40名が参加し、沿岸部における鉄の歴史の講義に興味深く耳を傾けていた。講座の後の質疑応答も活発に行なわれた。また、二回目の「鉄の歴史講座Ⅱ」は12月9日同市立図書館で開催された。



釜石市立図書館市民教養  
講座「鉄の歴史講座」



## 【平成31年度の活動予定】

- 考古研究部門・文献学的研究部門・教育地域貢献部門の三部門を中心に活動を展開する。活動予定は以下の通り。
1. 考古部門を中心に平泉出土中国産陶磁器の流通ルート等を明らかにし、さらに岩手県内の世界遺産及び追加登録等に対して、地域創生という広い視点からセンターが継続的に支援を行っていく。
  2. 平泉世界遺産教育の展開では平泉世界遺産教育の実施、さらに釜石市等で実施してきた生涯学習講座の支援を他の沿岸部市町村に拡大する。
  3. 三陸復興と観光振興への展開では復興は「人づくり」をコンセプトにソフト面からこれに関わっていく。
  4. 地域創生関係では平泉文化の発展の歴史を、今後の地域への持続的発展へ結びつける「平泉学の地域創生」という観点とリンクさせていく。
  5. 世界遺産活用のあり方(モデル化)の確立ではこれまでの「平泉学」の確立における各研究活動の実績を踏まえ、その研究成果を国内外に発信する。

## (6) 地域防災教育研究部門

部門長 越谷 信 (理工学部 教授)



地域防災教育研究部門を担う地域防災研究センターは、自然災害解析、防災まちづくり、災害文化の3つの分野の教育研究に取り組む。具体的には被災地域に入り、被災状況調査、地震・津波などの解析、復旧・復興まちづくりの支援、教育活動支援や伝承・記録の支援等を地域の人々とともに実践している。さらに、阪神淡路大震災、中越地震などの震災・復興の体験を国内外の大学、または南海トラフ等の今後の震災が危惧されている地域の大学との連携を深め、過去・現在・未来を貫く相互の学びの場の創出へとつなげることを当面の課題とする。

地域防災教育  
研究部門 HP



### 活動テーマ と 概要

### ・安全なまちづくりと災害文化を育む 地域防災拠点の形成

代表者 理工学部：越谷 信

担当者 人文社会科学部：後藤 尚人、五味 壮平、田中 隆充、松岡 勝実、  
杭田 俊之

教育学部：田代 高章、麥倉 哲、大野 眞男、田中 成行、森本 晋也

理工学部：小林 宏一郎、今野 晃市、南 正昭、本間 尚樹、大河原 正文、  
大西 弘志、小笠原 敏記、小山田 哲也、山本 英知、  
鴨志田 直人、松林 由里子、谷本 真佑

農学部：井良沢 道也、広田 純一、三宅 諭

連合農学研究科：比屋根 哲

男女共同参画推進室：堀 久美

国際連携室：石松 弘幸

地域防災研究センター：福留 邦洋、熊谷 誠

三陸復興・地域創生推進機構：今井 潤

- ・これまで岩手大学が実施してきた地域密着型の活動（防災体制構築への支援、防災教育）をさらに拡充し、東日本大震災による被災地の復興に向け、「施設づくり」「まちづくり」「ひとづくり」に貢献
- ・地域特性に応じた防災対策と、津波常襲地帯に暮らすための知恵である災害文化からなるボトムアップ型防災システム（三陸モデル）を構築
- ・三陸モデルを、今後巨大地震の発生が危惧される東南海地域などへ展開
- ・他大学、他研究機関と連携し、相互補完的な事業実施により効果的な成果を創出

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門

## 活動内容

### ● 地域を支える防災リーダー育成プログラム

- 日時：平成30年5月26日～12月15日 隔週土曜日
- 場所：岩手大学共用教育研究棟内リーダー育成プログラム講義室 他
- 概要：防災リーダー育成プログラムは地域防災活動の重要性を地域、学校、職場などへ伝え、そこでの活動を牽引するリーダーを育成することを目的に平成19年度からスタートし、今年度で11回目の開講となった。約半年にわたる育成プログラムは、地学及び気象等の基礎となる理科を学習する「基礎講習」、地震・火山/地盤・洪水・津波防災・斜面災害・防災まちづくり・危機管理講座などのテーマごとに専門知識の習得を目的とした「テーマ別講習」、習得した専門知識を地域に伝えるプレゼンテーション能力を向上させる「演習」から構成され、最後に、受講者により「演習」で作成したプレゼンテーションの発表会が修了試験として行われた。今年度は、22名の受講があり、そのうち16名が修了認定、12名がリーダー認定を受けた。



防災リーダー育成プログラム 1



防災リーダー育成プログラム 2

### ● 国際防災・危機管理研究 岩手会議

- 日時：平成30年7月17日～7月20日
- 場所：アイーナ（いわて県民情報交流センター）7階  
小田島組☆ほーる 他
- 概要：Harvard Kennedy School, USA、Tsinghua University, Chinaとともに本センターが主催として「大規模災害」、「緊急対応」、「地域復興」をテーマに学術発表の場として開催したもので、16カ国から合計587人の参加があった。また、学術発表のほか、岩手県（「いわて復興未来塾」）と連動したセッション、東日本大震災における政府機関（復興庁、国土交通省、経済産業省）、大学（岩手大学、東北大学、福島大学）の役割などが紹介された。予想を上回る一般参加者数は、東日本大震災発生後、岩手県内で開催する初めての防災・復興に関する国際会議への関心の高さがうかがわれるとともに、国内外の知見を市民が共有できる機会になった。



国際防災会議 写真1- 会場の様子



国際防災会議写真2  
メインホールでのフォトセッション

### ● 災害危機管理フォローアップセミナー

- 日時：平成30年7月27日
- 場所：岩手大学地域防災研究センター会議室（理工学部共用教育研究棟1階）
- 概要：平成26年度から開催されている防災・危機管理エキスパート育成講座修了者に対して、講座内容を拡充した内容を学ぶフォローアップ企画として実施したもの。2回目の開催となる本年度は、図上訓練のファシリテーターとしてのスキルアップを目指して、図上訓練の実施要領の復習と、防災クロスロードやDIG、HUGなどの各種防災ワークショップツールを実際に用いた実習が行われた。



### ● がんちゃん Jr. 防災リーダー養成講座 2018

■日時：平成30年9月3日、4日、14日

■場所：岩手大学北桐ホール ほか

■概要：平成29年度から、盛岡市立上田中学校から当センターと本学教育学部・教職大学院への協力依頼により始まった「がんちゃん Jr. 防災リーダー養成講座」を本年度も行った。この取り組みは、全校生徒を対象とした中学生向け防災リーダー養成講座で、学年ごとに異なるテーマが設定され、それぞれ座学の「防災の授業」とグループに分かれて取り組む「防災の演習」の2部構成となっている。今年度の演習内容では1年生が地震発生時の対応を考えるワークショップに、2年生が大雨洪水時の対応について考えるワークショップに、3年生が地域で想定される災害リスクや防災に役立つ施設・場所などを地図上に書き込みながら災害時の対応を検討する「DIG (Disaster Imagenation Game)」に取り組んだ。



がんちゃん Jr リーダー 講義の様子



### ● 災害危機管理エキスパート育成講座

■日時：平成30年9月12日～15日、10月9日～10日、11月12日～13日

■場所：岩手大学復興祈念銀河ホール ほか

■概要：東日本大震災の教訓をもとに、大災害では行政職員だけではなく、医療関係者や学校関係者など、あらゆる機関での防災・危機管理のエキスパートの存在が必要との考えから、災害時の危機対応とその効果的な推進のために必要な知識やスキルを持った防災・危機管理のエキスパートを育成することを目的に、地方自治体や事業所の職員、医療関係者、学校関係者、防災に関心のある一般市民を対象として開催されたもの。本年度で開講は6回目。講座全体は、座学である「基礎コース」と災害対応のイメージ力を養うワークショップを行う「実習コース」、実際の行政機関における災害対策本部を再現し、ロールプレイング方式で災害対応の模擬訓練を行う「総合実習コース」の3部構成となっており、今年度は「基礎コース」、「実習コース」それぞれで18名、「総合実習コース」で28名の参加があった。



危機管理エキスパート演習の様子



危機管理エキスパート講義の様子

### ● 災害における避難行動・生活について

■日時：平成30年9月9日

■場所：久慈市文化会館（アンバーホール）

■概要：防災の日（9月1日）や台風、秋雨前線など防災強化月間において防災体制の強化や地域住民の防災意識向上をめざして久慈市が主催した防災講演会における講演。特に風水害対策の啓発を要望されたため、過去の水害における事例紹介などから事前の避難計画の重要性、地域で開設、運営する避難所などについて指摘を行った。



### ● 釜石市立釜石中学校避難所運営研修

■日時：平成30年10月17日

■場所：釜石市立釜石中学校 視聴覚室および多目的室

■概要：釜石市立釜石中学校からの依頼により、3学年全体（113名）を対象に、中学校が避難所となった場合の運営について検討するワークショップを行ったもの。当日は、3学年全体を午前、午後の2グループに分け、1グループ8班体制で避難所運営に関する課題について検討し、グループごとに検討した内容の発表、全体での共有を行った。また、ワークショップの実施に先立ち、3学年の担当教員が各テーブルにおいてファシリテーション行えるよう、事前に内容の説明と事前講習を行った。



釜石中学校避難所運営研修

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門

## ● 矢巾町高田地区「災害の勉強会」

■日時：平成 30 年 11 月 17 日

■場所：高田コミュニティセンター

■概要：岩手県からの受託業務である「岩手県自主防災組織設立・活動活性化支援事業」の取組みの一環として矢巾町高田地区を対象に「災害の勉強会」を開催したもの。会では、矢巾町役場の防災担当者から地区の中で過去に生じた災害、特に水害の発生事例の紹介があり、地域防災研究センターからは水工学の兼務教員から、近年、甚大化・頻発している水害の傾向と水害発生メカニズム、発生時の留意点等についての講演が行われた。事業対象地は高田3区の一地区であったが、3区区長、矢巾町との協議で、隣接地区である高田1、2区にも呼びかけて勉強会を開催することとなり、全体で28名の参加があった。



災害勉強会の様子

## ● 岩泉町自主防災協議会視察研修

■日時：平成 31 年 1 月 24 日

■場所：岩手大学理工学部7号館2階教室

■概要：岩泉町自主防災協議会からの視察研修依頼により、避難所運営ワークショップを行ったもの。参加者が岩泉町内各地の代表者であったため、町内4か所の避難所の地区ごとに、4つのグループに分かれてもらい、1避難所1グループの割り当てで施設に併せたそれぞれの避難所の使い方を検討した。また、併せて過去の避難所運営で実際に生じた課題を提示し、それぞれのグループで対応を検討した後、各グループからの発表を行い、検討結果を共有した。



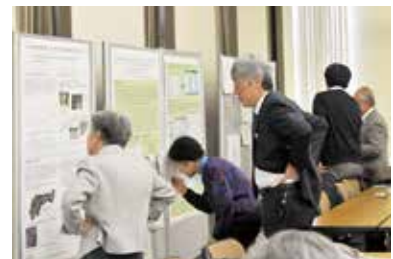
岩泉町自主防災協議会視察研修

## ● 第四回災害文化研究会

■日時：平成 31 年 2 月 14、15 日

■場所：岩手大学一祐会館 会議室

■概要：「忘れない～生活が作るレジリエンスと災害文化」をテーマに、1日目に「宮古市における災害／文化の伝承を見る」巡検を、2日目に岩手大学一祐会館において全体会・ポスターセッションが実施された。巡検では、東日本大震災後の宮古市における新しい街づくりとともに、被災体験を語り継ぐ被災地の中学校の資料室・国指定文化財となった蔵を活用した地域創生プロジェクト、南北朝時代から続く黒森神楽を見学した。2日目の全体会では、津田喜章氏（NHK 仙台放送局アナウンサー）による、東日本大震災直後から担当されている番組をもとにした「市井の声に見る被災地の真実～震災8年継続取材から分かったこと」と題した講演があり、報告・ディスカッションでは、資料のアーカイブ化・地域復興に果たす学校の役割や心の深いところでの復興の必要性の指摘があった。



災害文化研究会



### ● 矢巾町婦人防火クラブ 第2回防災研修会

■日時：平成31年2月17日

■場所：盛岡消防矢巾分署研修室

■概要：矢巾町婦人防火クラブが主催する第2回防災研修会において、町内の施設利用を想定した避難所運営ワークショップを行ったもの。ワークショップでは参加者が6グループに分かれて、町内の拠点避難所となる施設の図面を用いて避難所運営における具体的な施設の使い方などの検討を行った。併せて、過去の避難所運営で実際に生じた課題を提示し、それぞれのグループでの解決方法を検討した後、グループごとに発表を行い、検討結果を共有した。



矢巾町婦人防火クラブ

### ● 第21回地域防災フォーラム 「多発する自然災害と大学の役割」

■日時：平成31年3月15日

■場所：岩手大学復興祈念銀河ホール

■概要：21回目となる今回のフォーラムは、2部構成となっており、学外、学内より合計37名の参加があった。第1部ではセンターの3部門（自然災害解析、防災まちづくり、災害文化）から部門長による活動報告があり、近年の風水害における現地調査や九州北部豪雨被災地における復興状況調査などの研究活動について紹介された。第2部では、30年度のセンター活動として「国際防災・危機管理研究岩手会議」、「岩泉町台風災害と学校タイムライン作成」、「岩手県自主防災組織設立・活性化支援事業の取組み」について報告が行われ、最後の質疑応答では地域コミュニティにおける「防災」の位置づけや、センターの研究活動の今後の展開などについて、質問や意見などが寄せられた。



第21回地域防災フォーラム 会場の様子



第21回地域防災フォーラム部門長からの報告



### ● 春呼び祭「災害後、決断しなければならないこと ～体験者の声に学ぶ～」

■日時：平成31年3月17日

■場所：陸前高田グローバルキャンパス

■概要：春呼び祭において、来訪者を対象に、当時の避難所運営の経験者を交えた避難所運営ワークショップを開催した。市内外から一般市民、学生、あわせて25名の参加があった。ワークショップでは、東日本大震災時に、陸前高田市内に開設された避難所において実際に課題となった出来事について対応の検討に取り組んだ。市内の特徴的な3箇所の避難所を想定して課題を設定したほか、各テーブルに、ファシリテーターとして陸前高田市防災マイスター認定者を、アドバイザーとして各避難所で運営の中心的な役割を果たした市民3名を配置するなど、ワークショップを通して参加者と陸前高田市民がやり取りをしながら課題検討に取り組める場づくりをしており、参加者と陸前高田市民の間で活発な情報交換や議論が交わされていた。



春呼び祭「ワークショップの様子」

## ● 岩手県教育委員会・岩泉町教育委員会との 学校防災に関する協定

平成 28 年の台風第 10 号災害の教訓を学校防災の充実に生かしていくため、地域防災研究センターは平成 29 年 6 月 14 日に、岩手県教育委員会及び岩泉町教育委員会と学校防災に関する協定を締結した。この協定に基づき平成 29 年度は防災教育教材の開発等を行った。

平成 30 年度は、防災教育教材や「学校版タイムライン」の普及・啓発を図るため、岩手県防災教育研修会で「学校版タイムライン」作成の講義や演習を行ったり、岩手県内の小学校で防災教育教材を活用した授業を実践した。また、台風第 10 号災害の教訓や岩泉町立門小学校の復興教育・防災教育の実践等を紹介した「学校防災啓発リーフレット No.3」の発行等を行った。



協定に基づく取組①「久慈市立山形小学校でのワークショップ」



協定に基づく取組②  
「岩手県防災教育研修会」

## ● 釜石市鵜住居地区における防災学習プログラムの開発

東日本大震災の教訓を後世に伝えるため、釜石市の津波伝承施設「いのちをつなぐ未来館」の展示に関する協力を行うとともに、施設を活用した防災学習プログラムづくりの協力を行った。具体的には、発災時の釜石東中学校の生徒の避難行動の追体験の学習プログラムの開発である。釜石市をはじめ地域の方々、震災を体験した元釜石東中学校生徒の方々と共に、効果的な学習内容を検討し、高知県の小学生、東京都の高校生、岩手大学教育学部の学生、海外の研究者等を対象に実施した。実施にあたってはアンケート等を実施し、効果的な学習方法の検討を行った。



鵜住居での開発プログラム②  
「東京都の高校生の体験学習」



鵜住居でのプログラム開発①「国際防災・危機管理研究岩手会議―釜石エクスカージョン」

## 【平成 31 年度の活動予定】

今年度は、地域防災に関する調査研究を進める中で、それら研究活動の紹介や地域への成果還元を目的として「地域防災フォーラム」（第 22 回を 7 月に予定）や「第 5 回災害文化研究会」を開催する予定である。研究成果や活動の海外発信として国連防災会議（ジュネーブ、仙台）など国際的な発表の場への参加やセッションの開催、研究発表も行う予定である。

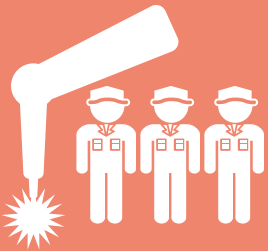
地域防災に関する普及・啓発については昨年度、岩手県の依頼により取り組んだ「自主防災組織活性化モデル事業」について、今年度も新たな地区を対象に取り組む予定である。また、昨年度のモデル対象地区であった矢巾町については、今年度は町からの依頼により継続した事業を進める予定である。これらの他に社会貢献活動として、これまで地域における防災人材の育成を目的に継続的に行われてきた「地域を支える防災リーダー育成プログラム」、「防災・危機管理エキスパート育成講座」および「フォローアップ講座」、「がんちゃん Jr. 防災リーダー養成講座 2019」などを予定している。

その他、センターメンバー教員による研究紹介、情報交換、交流を目的とした「センター・ランチョン」や、岩手県内の災害対応人材の育成や、防災対応機関の相互連携強化を目的とした「岩手地域防災ネットワーク協議会」の運営、国内外防災関連機関・大学等との交流、研究・活動成果を取りまとめたセンター年報の発刊などに取り組んでいく予定である。



## (7) ものづくり技術教育研究部門

部門長 長田 洋 (理工学部 教授)



ものづくり技術教育研究部門は、地域ニーズに対応した金型、鋳造、複合デバイス分野における先端的水準の研究成果を基に、地域ニーズに対応した金型、鋳造、複合デバイス分野における高度専門技術者の育成のためのものづくり講演会、講習会、セミナーなどの取り組みを進めている。

### 活動テーマ と 概要

#### ・ものづくり技術の人材育成セミナーと講演会の開催

代表者 理工学部:長田 洋

担当者 理工学部:西村 文仁、廣瀬 宏一、平塚 貞人、水野 雅裕、八代 仁、平原 英俊、脇 裕之、水本 将之、鎌田 康寛、恒川 佳隆、藤代 博之、吉本 則之、西館 数芽、小林 宏一郎、本間 尚樹、清水 友治、吉原 信人、吉野 泰弘、内館 道正、土岐 規仁、芝崎 祐二、叶 榮彬、関本 英弘、村岡 宏樹、阿部 貴美、

農学部:伊藤 菊一、武田 純一

研究推進機構:木村 毅

岩手のものづくり教育研究において、地域のニーズに対応した金型技術分野、鋳造技術分野、生産技術分野における高度専門技術者の育成のためのものづくりセミナーと講演会を開催した。

### 活 動 内 容

#### ● 鋳造技術研究センター講演会の開催

6月27日に、水沢サンパレスホテルにおいて、クニミネ工業株式会社の阿部清隆氏より「当地方における適切な砂管理方法と鋳造業界の進むべき方向」と題して、最適な鋳物砂の製造について講演会が開催された。

#### ● 金型技術研究センター高度人材育成特別講座の開催

7月23日に、北上市産業支援センター研修会議室において、アルプス電気株式会社技術顧問の谷本勲氏により、「効率を忘れた技術マネジメント ～昨今のデータ改ざん事件に思う～」と題して、技術マネジメントについての講演会が開催された。

#### ● 鋳造技術研究センター特別講演会の開催

9月12日に、奥州市水沢地区センターにおいて、株式会社アイメタルテクノロジーの宮西義明氏により、「鋳物工場における設備管理と設備更新事例」と題して、実例に基づいた企業における鋳造設備の管理の大切さについて講演会が開催された。

実践領域			教育研究領域			
三陸復興部門	地域創生部門	生涯学習部門	三陸水産 教育研究部門	平泉文化 教育研究部門	地域防災 教育研究部門	ものづくり技術 教育研究部門

## ● 金型技術研究センター・鋳造技術研究センター特別講演会の開催

12月20日に、岩手大学において、千田精密工業 代表取締役 千田伏二夫氏による「技術を身に付け、職場を創る人材へ～どこまでも夢を追って～」と、大阪府立大学 准教授 柴原正和氏による「ものづくりにおけるシミュレーション技術の活用例」と題する2件の講演会が開催された。



講演する柴原正和氏



講演会の様子

## ● ASIA JOINT SYMPOSIUM 2018 の開催

10月24日～25日にハンバット大学、大連理工大学と共催で ASIA JOINT SYMPOSIUM 2018 が開催された。金型技術に関するセッションでは、材料科学、加工技術、成形技術に関する研究報告がなされた。

## ● 生産技術研究センター花巻サテライトセミナーの開催

5月から12月にかけて、有機半導体デバイスに関する学生向けセミナー（有機エレクトロニクス基礎セミナーⅠ、Ⅱ、ディスプレイ進化論と有機ELへの期待、太陽エネルギーの活用と有機太陽電池のいろは）を開催した。



第4回花巻サテライトセミナーの様子

## ● 生産技術研究センターシンポジウムの開催

2月13日にホテルグランシェール花巻にて、「ハイテク技術の農業応用」をテーマに、岩手大学 高橋克幸氏、芝崎祐二氏、梅木新太郎氏、和同産業株式会社 鎌田征丞氏、株式会社エリオニクス 清野悠太氏より、それぞれの専門分野からご講演いただき、情報交換および討論が行われた。



芝崎祐二氏による講演

### ● 三陸復興プロジェクト高度ものづくり人材育成講座の開催

被災した三陸沿岸地域の復興推進の取組の一つとして、三陸地域でのものづくり人材の高度化を図るため、3月25日に大船渡市「シーパル大船渡」にて、「人材育成事業と金型、鋳造、生産技術研究センター事業紹介」と題したセミナーを開催した。



廣瀬宏一教授による講演

### ● いわて半導体アカデミーの実施

本県における半導体関連産業の集積加速を受けて、県内大学生や社会人等を対象とした「いわて半導体アカデミー」を設置し講義や実習を行った。大学生コースは講義15回、実習2日間、インターンシップ3回、社会人コースは講義7回、実習2日間、出前講座は講義を5回実施した。



大学生コース講義の様子



大学生コースインターンシップにて



出前講義の様子



社会人コース実習の様子

### 【平成31年度の活動予定】

岩手のものづくり教育研究において、地域のニーズに対応した金型技術分野、鋳造技術分野、生産技術分野における高度専門技術者の育成のためのものづくりセミナーと講演会を開催する。